

## 野川第一調節池 平成 20(2008)年度昆虫モニタリング報告

野川自然の会 モニタリング部会 昆虫班

『野川自然の里』に創出された自然環境を順応的に維持管理していくために、その環境がどのように移り変わっていくかを把握するために、モニタリング部会では野鳥・水生生物・植物などとともに昆虫類についてもモニタリングを行った。

トンボ・バッタ類などを中心とし、また第一調節池周辺を生活の場とする他のさまざまな昆虫についても記録した概要を報告する。

### 1. 調査目的

第一調節池内で自然再生事業の実施された地域、またこれから計画される地域における昆虫類の生息状況について、変化を調査・記録する。

### 2. 調査日

平成 20 年(2008)4月 26 日:第3回目

平成 20 年(2008)7月 12 日:第4回目

平成 20 年(2008)10月 16 日:第5回目

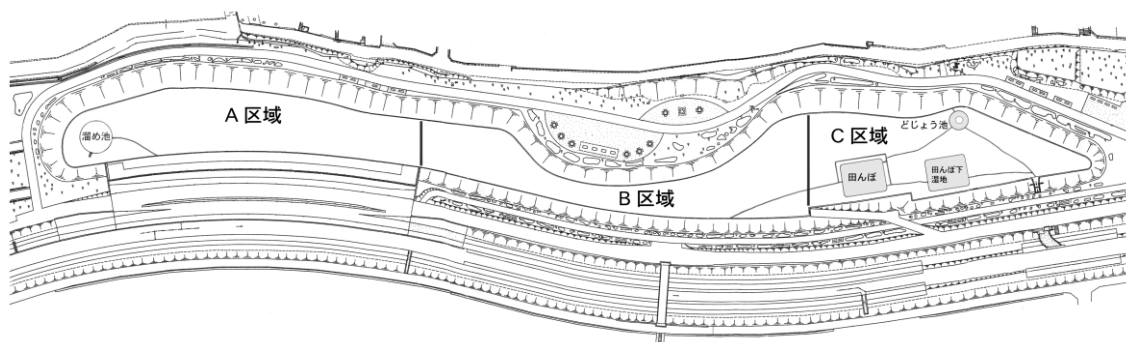
### 3. 調査項目

- 水辺環境の田んぼ・池を代表する指標生物として、トンボ類(蜻蛉目)の出現種の確認・およびその個体数・生息環境。
- 調節池内の広い草地を代表する指標生物として、バッタ類(直翅目)の出現種の確認・生息環境。
- 上記以外の昆虫類についての確認・記録。
- 冬期については実施しなかった。

### 4. 調査範囲

田んぼ・どじょう池・湿地池を中心とした第一調節池とその周辺。将来の第三期整備事業ではほぼ全域が対象となるため、現時点より第一調節池全域を調査対象範囲とする。

調査に当たって、基本的に第一調節池内の低地と法面を対象とし、3つの区域に分ける。2008 年から A 区域には新たに溜め池環境が加わった。



A 区域(西側) = 調節池西端から越流堤の東端あたりまで

B 区域(中央) = 越流堤東端から田んぼ付近の斜路手前まで

C 区域(東側) = 斜路の手前から調節池東端まで

## 5. 調査方法

- ルッキング(肉眼・双眼鏡など)による確認
- 「見付け取り」や、補虫網を用いた採集法
- 写真同定・標本同定も利用

上記の方法を用い、各区域内で20分間ずつ調査したあと、10分間程度かけて同定・記録するのを基本とした。トンボ類についてはラインセンス法を用いて、おおまかな個体数も記録した。

基本的に、確認できた昆虫類はもといた場所に放した。しかし現場での不明種については、写真で確認できるものは撮影し、標本同定できそうなものについては必要最低数をサンプル採集した。

## 6. 調査担当者

野川自然の会の会員が担当した

## 7. 調査結果

4月 26日: 全 49 種類確認(トンボ類:0 バッタ類:3)

7月 12日: 全 60 種類確認(トンボ類:6 バッタ類:13)

10月 16日: 全 78 種類確認(トンボ類:8 バッタ類:17)

以下に、特徴的な種についてピックアップしてみる。

### トンボ類

4月 この時点ではまだトンボの出現はなかった。

7月 トンボ類ではアジアイトトンボ・シオカラトンボ・ショウジョウトンボ等が田んぼや湿地池で確認できた。ミヤマアカネは側溝沿いの草むらで確認した。

10月 アオイトトンボの確認。アカネ類は4種類。コノシメトンボが特に多かった。ミヤマアカネはやはり側溝沿いの草地中心。

### ※ 野川本川でのミヤマアカネ繁殖の確認

7月 13日に小金井新橋においてアカネ類のヤゴ5匹採集・飼育。うち2匹羽化に成功。ミヤマアカネであることを確認した。このことにより、野川本川においてミヤマアカネが繁殖していることがわかった。

この他マユタテアカネも田んぼに飛来するが、周辺で繁殖しているかは不明。

### バッタ類

4月 ヒメギスの幼虫が目立った。成虫は夏以降、草むら深くで生活するためなかなか姿が見られないが、この時期の幼虫はハルジョオンやスズメノカタビラなど背丈の低い草むらで暮らしているのがよく観察できる。

7月 キリギリス類ではヒメギス・コバネヒメギスの成虫も見られた。バッタ類は、新たにできた溜

め池・用水側溝沿いでハネナガヒシバツタを確認。明るく湿った環境を好む種。

10 月 草丈の低い A 区でササキ類が多い。コオロギ類ではオカメコオロギ類 2 種の鳴き声。シバズは全域で普通。バツタ類はトノサマバツタ成虫。ツチイナゴがメドハギの葉を食べるのを確認。また、野川周辺でもまれなショウリョウバツタモドキが記録された。

#### その他

4 月 春に出現するピロウドツリアブやヒゲナガガの仲間、ミヤマチャバネセセリ等の確認。またその他の昆虫では幼虫が目立っていた。

7 月 田んぼ畦でコハンミョウ成虫。用水側溝でナガヒョウタンゴミムシを確認する。歩行中に側溝に落ち込んだ個体をよく見かける。ハチ類では、(サト)ジガバチを、チョウ類ではギンイチモンジセセリ。幼虫がメドハギを食草にするツバメシジミも確認した。

10 月 C 区でエビイロカメムシを確認。イネ科高茎植物に依存する種。側溝沿いではハチ類が目立っていた。セイタカアワダチソウにはツチバチ類が多数来訪。トラマルハナバチの♂。また、メドハギにトクリバチ類の巣を確認。田んぼ水際ではカマバエ類、ミギワバエ類？がよく見られた。チョウ類ではウラナミシジミの記録あり。

#### 8. まとめ

モニタリングは継続して結果がでるものなのでまだ確実なことはいえないが、トンボ類についてはアキアカネ・マユタテアカネ・ミヤマアカネといったアカネの仲間が昨年同様確認できた。水辺環境は順調な様子である。しかし、時期的なものかタイミングかナツアカネが記録されていないこと、コノシメトンボが昨年より多かったことなど調査を継続していくなかでどうなるか注目したい。

また、立派なトノサマバツタの成虫が草地を力強く飛翔し、ツチイナゴがメドハギの草むらで多く見られた。ショウリョウバツタモドキは野川周辺でもなかなか見られない、ススキなど背の高いイネ科植物の群落にすむバツタである。草はらも良好な環境と思われる。

溜め池の創出や越流堤の改築と、環境の変化は流動しており、そのような中でいきもの相はどのような変化をみせていくのかを追っていきたい。

文責：高橋利行 2009,3,28